

平成26年11月（北島会長代行就任）

2009年 飯塚 大輔

バランスよく

142番目のランナーとなりました飯塚大輔です。学生時代はというと勉強、酒、部活、バイトを軸に過ごしていました。勉強は授業もですが就職試験の勉強で図書館にこもった記憶が懐かしいです。お酒は数々の失敗をしたことで、社会人になってからは人には迷惑をかけず自分に迷惑をかけるだけですむような術を学びました。部活は茶道部ということで集中力と相手をおもてなすことの大切さを仲間と学びました。アルバイトでは働いたことで得られるお金のありがたみを知りました。

と、きれいごとを並べてしまいましたが、学生時代には高崎線で高崎駅まで来ても、高崎駅周辺で見聞を広めていたため大学の授業を忘れてそのまま帰ってしまうことも数えるほどでしたがありました（両手、両足の指使えば数え切れるはず・・・）。もちろん、学問も学びたいと思う分野については積極的に学んでいたことはいまでもありません。

そんな高崎経済大学での経験を活かし社会人として5年間、成田空港や東京の港湾地区で働き仕事の厳しさ、楽しさを実感してきました。

今年の4月から転職し地元の市役所で働いています。職場には高崎経済大学出身者も多くおり、心強いです。一度地元を離れたせいか地元を客観的に見るができるようになり地元のいいところ、課題となるところも少しですが見えてきました。

社会人から始めた趣味はマラソンです。休日には群馬県で開催されているレースにも出場しています。走り終わった後の温泉は最高です！会場では時々、高崎経済大学陸上部のユニフォーム姿の学生を見かけると陸上部に縁のなかった私ですが懐かしく思います。埼玉県庁の川内優輝選手の弟も高崎経済大学出身で驚きました。

これからの社会は一筋縄ではいかないことも多いと思いますが、高崎経済大学で学んだことを活かし公私のバランスよく楽しみながら過ごしていきたいです。

次のランナーは茶道部時代の後輩の小林和未さんにバトンを渡します！

2010年卒 小林和未

茶道部で学んだもの

143番目のランナーとなりました小林和未です。

この度、大学の部活の先輩である飯塚さんからバトンをお受けしました。大学時代は茶道部に所属し、飯塚さんはじめ、諸先輩・後輩方にお世話になり、お茶の勉強に精進することができました。茶道は、来客者のことを考えながら行動に移すといった所作が多く、礼儀はもちろんのこと、ホスピタリティのあふれるものでした。その中で、相手のことを大切に尊重する「おもてなしの心」を学びました。この、自分自身のことよりも相手のことを先に考え行動に移していく姿勢は、非常に大切なことだと思います。

また、個人的なことになりますが、昨年からは転職し地域のお客様と窓口でやり取りする部署に配属になりました。こちらの窓口は土日窓口であるため、幅広い年代層の方にお越しいただき、さまざまなお客様を対応しています。そこで、一人ひとりのニーズをしっかりと把握し、茶道部で学んだ相手のことを思いやる「おもてなしの心」を生かして業務に取り組んでいきたいです。

次に、最近の趣味についてお話しします。私は旅行に行くことが好きです。これは一見すると普通な感じがしますが、最近のブームは「旅行に行き、大学時代の友達に会うこと」です。大学を卒業し、それぞれ

の地元や他の土地で就職して頑張っている友達に会いに行くことで、元気をもらうことができます。遠くに行ってしまった友達にはなかなか会えないですが、会えた時の嬉しさは最高です！久しぶりに会った時でも、昨日会っていたかのような自然な感じで大学の学生時代の話に花が咲き、会話が止まらなくなります。また、友達たちにとっては慣れ親しんでいる地元になるので、穴場スポットまで案内してもらえたり、通常では体験できない旅行をすることができます。

大学時代はゼミや部活に忙しく、毎日のように学校に通っていましたが、その中で笑いあい、時には泣きあえる大切な友人達に出会え、非常に濃い4年間を過ごすことができました。大学での4年間は、人生の宝だと思っています。大学生活の思い出を糧に、いろいろなことに頑張っていきたいです。 >

次のリレーのバトンは、職場の先輩である伊藤伶奈さんに託します。

平成27年

2011年卒 伊藤 伶奈

ご縁

144番目のランナーとなりました、伊藤伶奈です。職場の後輩である小林和未さんから、バトンをお受けしました。小林さんとは、高経在学中は全く接点がありませんでした。現在の職場でも、所属も勤務場所も違います。それにもかかわらず、こうして出会えて、たまに二人で飲みに出かけることができるのは、本当にご縁の賜物だと思います。今回は、その「ご縁」について書かせていただこうと思います。

私は一昨年、25歳で結婚しました。親や友人からは、「まだ早いのではないか」「もっと遊んだほうがいいよ!」等々、散々な言われようでした。(もちろん、愛情表現です。)その中で、「早いほうがいいんだよ」と言ってくれた少数派のうちの一人が、ゼミの恩師である大宮先生でした。「出会いというのは不思議なもので、いい出会いがあったら早いほうがいい。早く一緒になって、一歩でも早く信頼関係を築いたほうがいい。」

ご縁というのは細い糸のようなもので、大切に手繰り寄せて紡いでいかないと見えなくなってしまうものだ、私は思います。ご縁という、人との出会いをひとつひとつ大切に紡いでいращる尊敬する先輩が、次のランナーの五嶋さんです。私が社会人になり、新しいことやわからないことばかりで困惑していたときに、そっと私に手を差し伸べてくれた妖精さんみたいな方です(笑)。自分のことのように人を思いやって行動するとても優しい先輩で、いつも頼りにさせていただいています。お手本にすべき、こんなにも素敵な先輩が近くにいてくださるご縁に、本当に感謝です。五嶋信広さん、次のバトンをお願いします!

1990年卒 五嶋 信広

人生とは学びの連続

職場のリレー随想145番目のランナーとして職場の後輩の伊藤さんからご紹介いただきました五嶋と申します。卒業は平成2年3月ですので、早くも約25年、四半世紀という時間の経過に改めて驚きました。

高経大の4年間はサークル、ゼミ、アルバイトに励み、私の人間形成に大きく寄与したといっても過言ではありません。特に3年生時にはアルバイトに明け暮れ、勉強にはあまり熱心ではありませんでしたので、試験前の交友関係の広さ(?)と試験前夜のファミリーレストランでの集中力で何とか乗り切りました。今思い返してもあの頃の自分自身に感心します(笑)。サークルやゼミで苦楽を共にした仲間との時間は、私にとってかけがえのないもので、今でもお付き合いが続いています。

さて次に、最近の趣味というかマイブームについてお話しします。普通な感じですが私は旅行に行くことが好きで、ある意味使命感のようなものがあり、50歳までには全国47都道府県をすべて訪れたいと考えており、残すところあと4県となっています。その地方の名物や郷土料理を食べ、おいちいお酒を飲むことが一番の目的で、いわゆる食べ歩きです。最近、これが講じて料理に興味を持ち、ひと通りのことはできるのですが、手の込んだ料理が作れるよう日々勉強中です。また、日本は歴史のある国ですので、その地方の風土や歴史に触れるのも旅行の楽しみの一つで、歴史そのものにもさらに深い興味が湧いているところです。興味があるものを学んでいると改めて、何事も机に向かうだけが勉強ではなく、幾つになっても何処にいても、毎日が勉強だなあと感じるついこの頃です。

最後になりますが、勉強していた経済学については、現在の仕事の中で役に立っているとは言い難いものがありますが、学生時代に仲間たちと過ごした時間や様々な経験、これは私にとって本当に財産です。それがあるからこそ今の自分があるし、これからの人生においても大切にしていきたいものであります。

今後の高経大の益々の飛躍を祈念し、次のランナー、同級生の武藤くんにはバトンを渡します。

1990年卒 武藤 雅俊

世界歴史の流れに身をまかせ、子育てを学ぶ我輩

146番目のランナーとなりました、平成2年卒業の武藤です。

同じゼミの妖精さんみたいな五馬さんからバトンを受けました。

卒業して、もうすぐ25年経ちますが、前も後ろも霧の中、未だ子育て真っ只中です。最近、高崎に行くことも少ないですが、ホームカミングデーに家族で立ち寄りました。コンビニがあるのにびっくりしました。

思い返すと大学生活は、たった4年間で、お金もなく時間だけが無限にあると思われてた時ですが、今では取り戻せない大切な時間だったと思います。

驚きや新鮮さもなく過ごしているこの頃は、何十年経っても印象に薄いですが、短い時間でも感動や喜びなどが、よみがえってくる時の一つが、学生生活だったように思います。ゼミ合宿&温泉スキー、河川敷テニスコート、表銀座縦走、尾瀬合宿の水浸し、満天の星空と安いウイスキー、学祭後の酸っぱい部室、ミニコンボ販売、模範解答と追試、家庭教師、汗まみれのコンサートスタッフ……

子育てをしている日々は、毎日が一生懸命で振り返ることが少ないですが、子供のぬくもりを感じるとほのぼのとした気持ちになります。

イクメンとは、聞こえがいいですが、毎日がチビとの戦いです。暴れ子ヤギと年老いたペータの格闘のような日々で、子ヤギの企てに毎回、怒鳴りちらしています。それでも、寝ている子供は、愛らしいです。今日も子ヤギたちは布団を温めてくれています。

ふと周りを見ると、同年代の仲間はみな年取ったなあと感じます。当然、自分もそう見られていることでしょう。お金はなかったですが、学生の時はバブル全盛で、スキーに、テニスに、登山にと汗を流していました。「私をスキーに・・・」の世代で、社会に出た後もスキー場の往復に何時間もかけ、狐狸が出るような山道を四駆で通っていました。今では、土日でもスキー場の往復やリフト待ちに、それほどストレスを感じません。

経大スキー部には入ってなかったですが、学生時代からのスキー好きのまま、社会に出て、職場のスキークラブに入り、クラブの仲間もそのまま一緒に年をとっています。最近、スキーヤーも高齢化して、すごい滑りだなあと思っていた人が、レストハウスでヘルメットを脱いだ姿は、あれあれ、おじいちゃん。それでも、滑る姿は、アスリート。競技をしている高齢者も多いです。自分も、競技をかじり、未だに毎年の職場対抗GS大会を楽しみにしています。

好きに気ままに、書かせていただきましたが、この随想を書いて、いろいろ学生生活と今を振り返ることが出来ました。機会を与えていただいた皆様にたいへん感謝しております。

それでは、次のランナーをご紹介します。

最近、顔を合わせていないですが、このリレー随想をきっかけに連絡をとることが出来ましたゼミ友のひとりで結婚式に友人代表スピーチをいただきました田尻茂隆さんにバトンをお願いしたいと思います。

よろしくお願いします。～How do you do?～

1990年卒 田尻 茂隆

「時の流れに身をまかせ♪」

同期の武藤さんよりバトンを引き継ぎました田尻です
武藤さんの記事にもありますが 90年卒の私達は
卒業してもう25年になります 25年ですよ！早すぎませんか？

最近、歳を聞かれても「あれっ、今年で何歳だっけ？」と一瞬 考えてしまいます

この前まで「アラフォー」とか言ってましたがさすがに47になると・・・
精神年齢は経大生の頃に止まったままなのですがね・・・

こんな私は、卒業後 一旦メーカーに就職しましたが 約4年で実家のある
(みどり市) 笠懸に戻ってアルミサッシ販売業に日々追われています

平成の大合併後10年弱 たちますが 群馬県民からでさえ、今だに
「みどり市」ってどこ？
と聞かれますので 元々県外の方、あるいは卒業後県外へ移住されている方は

なおさらだと思います この機会にググってみて下さい

仕事で時々高崎に行くときは、無理やり経大前を通ったりしています
当時、よく行った周辺のお店はだいぶなくなってしまいましたが
経大の校舎はあまり変わらず 懐かしく ほっとします

最近の風潮なのか、規制が厳しくなって来ているのか
仕事上の講習会や勉強会に参加する機会が多くなってきました
でも面白いんです
新商品の事や違う職種の話も とても興味深く思えるんです
(まあ、忘れるのも早いですが)
学生時代に戻れるなら もっと色んなアルバイトや職業体験、会社訪問
あっ、旅行 それも世界一周位の・・・
もし現役経大生が読んでたら 是非、色んな事に挑戦して下さい

今回、このリレーの話を聞き バックナンバーの
ゼミ同期生の記事で お子さんの話があり「あれ、うちの子と歳が近いのかな」と
思っよく見たら13年前の記事でした
私のこの駄文も10年後位にも誰かに読んでもらえるのでしょうか？
それとも自分が読んで懐かしんだりするのでしょうか？
その前に私は10年後も元気なのでしょうか？
(ここんとこ老眼が進んできてまして・・・大丈夫かなあ)

でも、このリレーのお陰で とても懐かしい方とも連絡をとることができました
ひとえに、このHPを長年管理されている方々のお陰と思います
ありがとうございます

さて、今回は同期の吉見君です よろしくお願ひします

1990年卒 吉見 直樹

情報化社会の流の中で

田尻茂隆さんよりバトンを受け取りました。平成2年卒業の吉見です。
実は田尻さんからバトンを受け取る時に、訳あって海外に住んでいました。
メールで連絡があり、その後連絡手段をLINEに変更して、連絡を取り合うことができました。昔は海外と国内という、電話が高額だとかメールだとなかなか連絡がつかないとかでつついやり取りも希薄になるのですが、今はものすごく便利ですね。インターネットの技術で電話は格安だし、同じSNSに登録していればテレビ電話だって無料です。インターネット上のつぶやきに共感し、呼びかければ何十、何百人の仲間が集まるような気がします。

でも便利になった分、コミュニケーションが密になったかという、そうでもないような気がします。自分から情報発信はできるのだけれど、それに対する反応は普段顔を合わせて話している仲間より、ネットの向こうの知らない人が大多数、ということも多いのではないのでしょうか？それはそれで重要なコミュニケーションなのだけれど、その分顔を合わせて話している仲間とのコミュニケーションが少なくなってしまうような、そんな気がしてなりません。連絡を取り合う手段はたくさんある。けれどそれがかえってあだになって、「まあいいや。」とか「いつでも連絡取れるし」と疎遠になる原因になっていませんか？たまには実際に会いに行っ飲んで食事したりするのも大切ではないかと思ひます。

私が学生の頃は携帯電話やポケベル(死語?)はありませんでしたから、連絡手段は電話か、もしくは不意打ち訪問がメインでした。そのためにいろんなトラブルもありましたが、今となっては結構良い思い出だったりします。もちろん通信手段がなくて待ち合わせに遅れたり、すれ違ったりすることも多かったのですが、逆に待ち合わせに遅刻しない、待ち合わせ場所を確認するということがよくやっていたような気がしま

す。まあ、この点に関して私は相変わらずなので、いまだにいろんな人に迷惑をかけていますが、不便なら
ではの対策、便利ならではの問題、それぞれあるのではないかと思います。

高崎の様子はネットを通じて昨年の大雪とか、いろいろと見聞きしてはいました。そういう意味ではイン
ターネットはとても便利ですね。でもこうやって昔の仲間から連絡があるとまた感慨もひとしおです。さす
がに歳を取ったかな？という実感はありますが連絡を取り合っているとまた明日にでも宮ランチやパスタを
食べに行けそうな、そんな感じがします。

今の石川学長からは経営情報システム論を教えてくださいました。ここ2、3回の随想リレーメンバーは
情報システム論ゼミの仲間でした。携帯やインターネット、パソコンと情報機器の中で生き方もどんどん変
わってきていますね。それでは次はその情報化社会の中で今も悠々と生き抜いている、いつまでも若々しい
金子さんに随筆をお願いしたいと思います。

1990年卒 金子 靖至

コミュニケーション力雑感

吉見直樹さんよりバトンを引継ぎました、1990年卒業の金子です。

石川先生のゼミから1990年に卒業し、社会に出て早25年…。歳を感じる今日この頃です。私は社会人歴
25年＝営業職25年の人生ですが、今回は営業マンのコミュニケーション力について、寄稿させていただきます。

私は数回の転職後、現在は流通小売業向けIT営業を10年経験し、現在は管理職として老若多彩な部下と
接しています。

一般的に“営業”＝“話す(しゃべる)”職業と理解され、営業マンは“しゃべりが旨い”＝“コミュニケーショ
ン力が高い”と思われる様です。

私の部下及び私自身から営業を通したコミュニケーション力を簡単に述べたいと思います。まずは、私の
部下から…。老若関係無く、営業マンとしてお客様と関係作りに長けているのは“しゃべりが旨い”よりお客
様の話を良く聞く能力が高い人だと思います。“しゃべりが旨い”→自分が言いたいことばかり一方的では無
いのです。コミュニケーション力＝双方性が重要ということです。

では、恥ずかしながら私はというと…、自分のしゃべりを全面に出す傾向が強い様です。できる部下から
指摘され結構恥ずかしい思いをしました。25年間培った営業スタイルですので、なかなか変えることはで
きませんが、日々スタイルを変えるよう、努力をしています。

コミュニケーション力とは、相手の思うところを存分に聞き、聞いた内容を存分に理解をし、相手にお返
しをする。そのやりとりを繰り返し、近い人間関係を構築することだと思います。昨今、メール・SNS等
で面と向かって話すことが減少していますが、そのような時代だからこそ、相手としっかりコミュニケーシ
ョンを取ることが重要だと思います。

あまり纏まりが無い文章ですが、この辺で失礼します。

次回は、昼・夜(?)共に、コミュニケーション力が長けている小暮さんに随筆をお願いしたいと思います。

1990年卒 小暮 仁

今思うところ

前回、同期の金子靖至さんからリレーのバトンを受けました平成2年卒業の小暮と申します。

この度、諸先輩方や同窓生の方のご努力もあり、リレー随想がちょうど150回目ということで記念すべき
時に巡り合えたこと、本当に光栄だと思っております。

さて、現在のこのリレーは、平成2年卒業の石川ゼミ同級生でバトン引継ぎが行われております。ここ最
近は皆様の思うところと同じで、早25年というか、もう25年というか月日の流れを感じております。

学生時代は、とにかく群馬県内外を問わず、多種多様な個性的な人材が集まる場で人間形成のうえで非常

に貴重な経験をさせてもらいました。

前回の金子さんが言うことが私の全てではなく半分あたりというところですが、コミュニケーションって大切だなと思う今日この頃です。現在は伝達するツール（道具）がいろいろありますが、会ってお話することが一番大切なことだと思います。出会う人のそれぞれに意外な個性があり違う一面を見ることもできます。昔から「話上手は聞き上手」と言われますが本当にそのとおりで、ある意味、その人の人柄を観察しているのだと思います。

よく話が平行線だというのは、お互いの主張がぶつかりあっているもので、どちらかが一步下がると案外すんなり行く時があります。「間（ま）」とか「場（ば）」を取れる時が「聞いている」時なのかなと感じます。メールやSNS等ではなかなか伝わりにくいことが「人」に会うことでそれを解決出来るって素晴らしいことだと思います。

ここ最近は少なくなりましたが、卒業してから何回かゼミで一緒だった同級生とお酒を飲む機会があり、いろいろな話をしていました。その場ですぐみんなと打ち解ける仲間がいるのがとても幸せだなと思います。

最後になりますが、過去のバックナンバーを見ると本当にこの「リレー随想」が長く続いていること、とてもすごいことで大変感謝しております。その中には、しばらく会っていない卒業生の皆様方の近況や寄稿や「あの人が…」みたいのがあって、面白く拝見させていただきました。

これもひとえに、このホームページを管理されている方々のご努力のお陰だと思います。

では私が「今思うところ」は何なのでしょう…答えは、このリレー随想のバトンが引き継がれていることだと思います。途切れることなく引き継がれるのは、そう簡単ではないですね。

話はあまり纏まりませんでしたが、そろそろ、次の方にバトンを引き継がなければと思いましたので、冷静で落ち着きがあるように見えますが、案外、キャラクター的においしすぎる同期の宮内さんに随筆をお願いしたいと思います。よろしく願います。

尻茂隆さんよりバトンを受け取りました。平成2年卒業の吉見です。

まさかこんな時代がこようとは

1990年卒 宮内 慈之

現学長の石川先生のゼミで同じ時を過ごした生粋のユーモア人、小暮さんから151人目のバトンを引き継ぎました。平成2年卒の宮内と申します。

卒業して25年…今年は戦後70年という節目の年ですが、戦後25年を過ぎた昭和45年にはもう自分がこの世に生まれていたことを考えると四半世紀という時間は意外と短いかもしれません。とはいえ社会に出てから今日までには「まさかこんな時代がくるなんて」と感じずにはいられない出来事が何度もありました。硬軟取り混ぜて書かせていただきます。

1つめは阪神・淡路大震災です。震災当時は大阪に住んでいて、その前の年に結婚したばかりでした。すぐ傍の街で多くの方が亡くなり、都市機能が長期間マヒしたことにとっても衝撃を受けました。被災地に向かう車両で大渋滞した高速道路上にどこまでも灯り連なる赤いブレーキランプ、伊丹空港発の飛行機の窓から見えた建物の屋根にかけられた何千枚ものブルーシート、思い出だけで当時の無力感が甦ります。その後の住まいや暮らし方の価値観を変える出来事でした。

2つ目はインターネット・電子メール・携帯電話の利用増大に伴うデータ通信の普及です。新入社員当時、オンラインデータベースの販売営業業務に就いていました。パソコン通信のように、電話回線とモデムで企業のPCとホストコンピュータを接続し、新聞記事や経済統計、企業の財務情報などを検索、提供するサービスで、検索した情報はプリンタで印刷するのが主流でした。情報をパソコンに保存する方法をお客様に何度説明してもなかなか分かっていただけません。情報をパソコンに保存…そう「ダウンロード」のことです。その後ケータイ着メロやスマホのアプリなど今や当たり前の言葉になりましたが、昔を知る立場としては、ここまで「ダウンロード」という言葉が当たり前になる時代がこようとは…なのです。

3つ目はカーナビや携帯情報機器の地図機能の進化です。声で「どこどこへの行き方」と発するだけで最短ルートや料金まで教えてくれるなんて、かつて子供向け雑誌などで描かれていた「僕たちの未来はこうなる」といった記事で創造されていた世界を遥かに超えてしまっています。それでも人は道に迷うもの。私、

仕事で外出していると道を聞かれることがよくあります。昨今は「ここに行きたいのですが…」とスマホの地図画面を眼前に差し出す、おそらく就職活動中であろうお兄さん、お姉さん方が増えました。老眼進行中のおじさんはちょっと戸惑ってしまいます。反対に昔ながらのビジネス地図冊子と路上の地図看板を見比べている人を見かけたときは、こちらから「道分かりますか？」と声かけてしまいます。私が天邪鬼なだけでしょうか。

最後の4つ目は、東日本大震災（津波と原発事故）です。1978年の宮城県沖地震の後、通っていた群馬県の小学校の社会科授業で津波に関する先人の記録や教えに接する機会がありました。過去の津波到達地点に残された石碑の話や、避難時はてんでんこ（各自てんでんばらばら）に高台に一刻も早く逃げるとの話、小学生だった私の記憶に刻まれたいくつかの教訓は、その33年後により一層の説得力をもたらすこととなります。チェルノブイリで原発事故が発生した1986年は、高経大入学の年でした。1年時の一般教養科目「物理学」で、原発について肯定派、否定派に分かれてそれぞれの意見を述べるという授業がありました。私は事故の発生確率が原発事故<航空機事故との観点から肯定派で「必要悪だから仕方ない」との考えでした。今となっては、想像力のない浅はかな考えとしか言いようがありません。

原発は再稼働が目前に迫っている他、自衛隊の運用も妙な方向への舵取りが懸念されます。これからも様々な出来事が私に「こんな時代がこようとは！」と思わせてくれるでしょうが、それは人々の喜びのためのものであって、嘆きの「！」ではないことを願ってやみません。

今回はゼミの1学年先輩である倉石さんにバトンをお渡しします。よろしく願い申し上げます。

時とともに変わる自身

1989年卒 倉石 淳

152人目のランナーとなりました、平成元年卒の倉石です。在学中は石川ゼミと自動車部に所属していました。

大学の4年間を振り返ると、友人との楽しい時間と現学長の石川先生の教え数点？が今も自身の中に生き続けています。OBになってからもゼミのOB会にはほとんど出ていたので、年の離れた後輩たちとも交流してきました。私も50歳という節目を迎えたわけですが、私にも変わるポイントがありました。

一つ目は労働組合での活動。1992年から役員になり、2002年から4年間執行委員長を経験したことで、人との交流の幅、考え方の幅が広がりました。「人が仕事をする」という原点は誰にも変えられませんが、今も同僚や後輩と接するときに重点を置いています。今の時代は、仕事上で同じ職場の人への声掛け・相談が少なく、個で動きすぎかもしれません。雑談はよくしているようですが・・・。

二つ目はスキーとボウリング。この2つを35歳から運動として始めるきっかけになったのは、34歳のときに起きた胃痙攣と会社の後輩たちの熱心な誘い。医者からすすめられた温泉に行くようになって、学生のとときの交通事故以来出ていた左足親指の付け根と左肩冷えによる痛みが消えました。憂鬱な冬が一変、後輩たちからスキーという楽しみをプレゼントされました。また、通年できるボウリングは、今も始めた当時から試合で投げている人たちと試合をしています。ずっと続ける楽しみも持てました。

三つ目はモータースポーツ。特に2004年から開催されたラリージャパンでは、多くのレジェンドとお話する機会がありました。中でも木全 巖（きまた いわお）さんとアンドリュー・コーワンさんはラリー界のレジェンドですが、気さくで真面目にお話しますから、話をしている間にかいた汗の量は最大。残念ながら木全さんはお亡くなりになりましたが、あの緊張感はもう味わえないでしょう。夢のような時間でした。

そして今は、撮り鉄。2012年の夏に1台のカメラを手にして、2013年から再開。中学生までは撮っていましたが、35年ぶりに撮ってみました。家から古いネガも出てきてデータ化して修正中です。そして気が付くと、新幹線が開業して多くの名列車が消えるという大きな節目の年を迎えました。普段、何気なく利用している列車が、ある日変わったり無くなったりしますから、記録はとても大切。ときどき鉄道ファンという雑誌に撮った写真が出たりしますが、何よりも風景や自然の音などを見聞きする待ち時間と一瞬を撮る集中がとても良いリフレッシュになっています。消えた列車たちは・・・「A列車で行こう」で走らせればいいか・・・。

これからも、変わるきっかけがどこかにあるのでしょうか。当面では、会社を辞めた先輩の旧家で所持している鉄道関係の資料、写真、備品の整理を手伝うことになるのですが・・・。

最後に・・・皆様のお手元にホームカミングデイの招待状が届いたと思いますが、ここ数年行けなかったので、今年は参加予定。久しぶりに多くの人にお会いしたいと思います。

現在進行中の恩師の思い出

1970年卒 藤森 友明

153人目のランナーとなりました1970年と2010年卒の藤森です。卒業年次から判りますように、古希目前です。在学中は牧野・多田・石川ゼミと会計学研究部に所属していました。現在は東京三扇会で副会長を仰せつかっています。以下、石川先生との縁を中心に述べさせていただきます。

石川ゼミの特徴の一つに卒業時に卒業生一人一人に色紙が渡されるというものがあります。そこには先生の鋭い観察眼と文章力とウィットが合成された文章が記載されています。各自の特徴と励ましが記載されています。私もこれを頂戴しましたが、そのような色紙が学部卒業生全員に渡されているということを知ったのは、平成24年1月の石川ゼミのゼミ合宿のときでした。

あらためて、大学の7年間を振り返ると、団塊の世代一期生としての大学紛争の経験と60の手習いとしての最近の経験に分かれます。60の手習いを指導して下さったのは石川先生です。石川先生と初めてお会いしたのは1992年の富山大学での学会でだったかと思います。23年前ということになるのでしょうか。高崎経済大学は50年を超える歴史を持ちますが、大学院の歴史は意外と短いです。1970年に卒業したときに大学院は存在せず、1971年に青山学院大学の経営学研究科に入りました。60才を目前にしてとある学会で石川先生とお会いしたとき、来春、高崎経済大学を受験しますのでお話ししたことを覚えています。当時石川先生は博士後期課程の学生を指導されており、博士号取得に邁進されていた関さんを連れて来られていました。後に関さんは高崎経済大学での経済・経営系博士の第1号を取得されました。60の手習いを決意した最大の理由は、クラブの1年先輩と1年後輩が早くに有名大学の博士号を取得されており、少しでもこれらの方々に近づこうというものでした。

翌春高崎経済大学の経済・経営研究科の博士後期課程に入学致しました。以後3年間、石川先生のきびしくも丁寧で温かい指導を受けました。大学院博士後期課程は3年間で12単位を取得が単位のしぼりです。学部では124単位～128単位の大学が多いことと比較すると非常に負担は少ないです。しかも、高崎経済大学は土曜日開講の仕組みをとっており、仕事を持ちながらの通学に便宜を図っています。石川先生は経営情報論の分野で学会をリードしてこられました。学会で指導的立場を長期間維持されるだけでなく、学会と個人の両ネットワークを駆使して、学生指導にも万全を期されました。教え子が学会発表の際には付き添って下さることも多く、心強かったです。

高崎経済大学で石川先生の指導を受けていた(平成19年～平成22年)時の石川先生は副学長でしたが、私が高崎経済大学の2回目の卒業式に平成22年、学生として臨んだ後、しばらくして学長就任が決まりました。学長職は激務であり、授業を継続するのは適当ではないとのご判断から、石川先生が担当されていた学部授業をやってみないかというお話をいただきました。これをお受けして、今年で5年目になります。石川先生がご担当だった経営情報論と経営情報システム論の他、ゼミ生の指導も引き継ぐことになりました。2年目からは、地域政策学部のコンピューティングⅢと情報基礎Ⅱも担当させていただいています。

石川ゼミは152番目執筆の倉石さん他のご努力でゼミ同窓会を長く続けてこられました。学長就任後は規模を縮小されていますが、今年の10月31日(土)のホームカミングデイには多くの卒業生が集まるのではないかと想像しています。ゼミの同窓会等を通じて、東京三扇会の年度幹事や役員に加わって下さる卒業生も出ています。この半年間、石川ゼミ卒業生がリレー随想の執筆者に加わって下さり、石川ゼミと東京三扇会のつながりが太くなりうれしく思っています。

現在も石川先生には公私にわたってお世話になっています。高崎←→上尾間で長時間の雑談に応じて下さったり、東京三扇会を支援いただいたり、さまざまな就活支援に影響力を発揮していただいたり、数えきれ

ません。話せばきりがありません。次回は同期で現役で活躍し、テレビ出演多数、講演依頼多数の売れっ子タレント、平野氏にバトンタッチします。

業界どっぷり45年

1970年卒 平野憲一

1970年卒の68歳。同期の友人千葉経済大学藤森友明教授に頼まれて、たすきを受け取りました。現役売れっ子タレント（藤森氏・笑い）です。

卒業と同時に証券界に入って、今までどっぷり45年です。証券会社の執行役員、顧問を経て昨年67歳で個人事務所を作って独立しました。ありがたい事に、たくさんの業界内外の友人たちが協力してくれました。独立の事も、日本経済新聞社が、人事欄では無く一般経済ニュースとして報道してくれました。月刊投資手帖（日本株式新聞社）が無償で東京事務所として編集室を提供してくれました。日本証券新聞社は毎週の私のコラムを作ってくれました。東洋経済オンラインも連載コラムを設定してくれました。20年近く出演していて知名度を確立してくれたラジオニッケイは、組織を抜けて一匹狼になった私を引き続き使ってくれました。東京MXテレビも同様です。同業他社であった水戸証券さんにおいては、自社の講演会の講師として毎季の催しに呼んで頂いています。その他たくさんの方からのご好意で、個人事務所維持の資金的見通しが立ったので、好きな執筆・講演等をしながら、ゆっくり、お世話になった方々への恩返しの仕事が出来たらいいなと思っていました。ところが、時々ゲスト出演していた、CS経済専門チャンネル日経CNBCテレビからコメンテーター就任を依頼されました。就任したら他所出演等の制限があるので、「お世話になった方々との仕事を断るわけにはいかない」としたところ、「これからの新しい仕事はともかく、今までの付き合いはそのままが良いので、是非」という事で、引き受ける事になりました。今までの仕事もあるのに、そのほかに週4日も拘束されることになり、原稿の締め切りに追われる（流行作家？）忙しい毎日が変わりました。友人たちに体の事を心配されています。しかし、好きな株評論の仕事であるし、週4日拘束されると言っても、朝のラッシュの後に出勤し、夕方のラッシュの前に帰れるので、68歳の体でもそれほど疲れません。それに人気はいつまで続くものではないし（芸人？）と思って、今を充実して過ごしています。

さて、この様な人生を送る事になったきっかけは、50年前、経大一年生の時でした。NHKニュースで、清水一行著「小説兜町（しま）」が売れていると報道されていたので、証券研究部で株の研究をしていたこともあり、興味本位で読んで見たら、衝撃を受けました。元日興証券株式部長をモデルにした相場小説でしたが、その主人公にほれ込んでしまったのです。個人情報保護の今では信じられない事ですが、本に作者の住所が書いてありましたので、（若かったので行動力があったのでしょうか）高崎から東京練馬の清水氏の自宅を訪ねて行きました。しかも、主人公に合わせてくれと談判に行ったのです。さすがに向こうも変な奴が来たと思ったでしょうが、「フィクションだから主人公は実在しないよ」と笑いながら対応してくれました。以来4年間、書生気取りで時々おじゃましてお話を聞いたり、銀座の高級クラブに連れて行ってもらったりしました。就職も、相場の神様と言われていた石井久氏が創業した立花証券が面白いよと、紹介状を書いてくれました。その後も清水先生には、お客さんになってくれたり、娘の名づけ親をお願いしたり、公私ともにお世話になりました。先般お亡くなりになりましたが、奥様と遺影（大きなイラスト画）の前で、コーヒーを飲みながらしみじみ昔話をしました。本当に、色々な方にお世話になりました。心から感謝です。

もう一人の師であり、93歳でご健在な「相場の神様」石井久氏から「針の落ちる音を聞け」と教わりました。世の中のわずかな変化に気づけという事ですが、私の聴力（能力）そのものや、聞いた音に対する判断力が、年相応に鈍ってきているのが残念です。しかし、先日、名古屋証券取引所主催の講演会に講師で行ったところ、ファンだと言う方から、スマホ（本体に）にサインしてくれと頼まれました。この様な方がいるうちは、もう少し頑張ろうと思っています。

また、現在同期の元富士ゼロックスの石橋君や藤森教授が世話人で、70年卒の仲間を中心に（他の年代の方歓迎）に、ゴロの同じ「三船会」を作っています。千葉県船橋市に集まれる仲間数人で始まりましたが、出席者の便宜を図る為、今は東京（浜松町）で、三か月に一度のペースで開いています。最初は唯の飲み会でしたが、その内それぞれの過ごして来た業界の事や、趣味の事を発表するようになりました。これがすごく勉強になり、楽しいひと時になっています。この環境がいつまで続くか分かりませんが、残りの人生を楽

しみたいと思っています。因みに、残りの人生のモットーを最近決めました。「人と争わない事。止むを得ず争う事になったら勝たない事。」です。今回は同期の須藤氏です。

女性に囲まれて

1970年卒 須藤元

◎ はじめに

同期の平野さんからバトンタッチ。先日の同期有志の集まり、浜松町での「三船会」でのこと。平野さんは最近新しい仕事に就いたそうで、私はこの年で新人だようれしそうにいていた。本当にうらやましいかぎりだ。実はわたしも些細なことであるが最近、同じようなうらやましいと思われてもよいかもしれない環境にあるようだ。仕事ではない。私はすでに60歳で定年の年金生活である。2年前から活動しているそこは女性ばかりである。少なくとも私より若い女性ではある。その人たちに囲まれて活動している。

1. [青春とはなんだ！](#)
2. [これが会社だ](#)
3. [マスコミに強い大学](#)
4. [営業と現場の戦い](#)
5. [オーナー経営者の実態](#)
6. [新橋の飲み屋街の近く](#)
7. [香川県の香川さん](#)
8. [特養老人ホームにて](#)
9. [パソコンに魅せられて30年](#)
10. [最後に、エディタについて](#)

◎ おわりに

私は大学時代に普通免許、二輪免許を取得している。それで今も乗ろうと思えば、大型バイクにも乗れるけど、やはり怖い。今欲しいのはホンダの軽スポーツカーS660だ。しかし、あれは二人乗りだし、荷物はあまり詰めないし、とても連れ合いの許可はおりない。それに年金暮らしである、軽なのに200万もする車は無理。購入して10年経過している現在の車をあと10年乗ろうかと考えているのが現実。ではレンタカーだ、こうなるとホンダではなく、マツダロードスターか日産フェアレディZだ。スポーツカーで志賀高原ルート、赤城、榛名や碓氷峠を走ってみたい。オートマではなく、マニュアルミッションの車に乗ってみたい。

今回は若手のホープ関口さんをお願い致します。

筆者紹介（この写真のどこかに写っています。）



青春とはなんだ！

思えば、周囲に女性がたくさんいるという環境は中学以来のこと。高校は地元の高崎高校。当時、普通高校は全国どこも男子と女子が別だと思っていた。あのころのテレビの学園ドラマ「青春とはなんだ」をみて、あれ！高校にも共学があるんだと初めて知って驚いた。大学はご存じのとおり、共学といっても、500人中女性は10名である。私が女子学生と会話したのは4年間で一度だけ。10月31日に開催された母校ホームカミングデーに参加して驚いたのは学内に女性があふれていることだった。聞けば、学生の4割が女性とのこと。学内で後輩である女子学生の一人に「学長の名前は？」と聞くと、うーんと笑っていた。今の人はこんなもんかな。その2時間後のカミングデイ懇親会で私と同年の学長とちょっと話した時にこのことは話題にしなかった。

これが会社だ

卒業後に都内新橋にある自動車専門誌の出版社に職を得た。社員は70名、女性は経理と総務に数人いるだけ。私は編集部勤務。周囲をみると机に座って勤務中でも、週刊誌や漫画を平気で読んでいる、隣の席の人と映画やレースの話題を延々と続ける、なんだかわからないが楽しそうに長電話する輩もいる。残業になって上司が帰れば、引き出しの中からウイスキー瓶を取り出す、休憩室でカードゲームをする、隣接した銭湯に行く。夜間には受付がいなくなるのでときたま勝手に社のビルに入ってくる千葉のおばちゃん（※大きな荷物を背負い、個人宅や小さなビルなどに行商して歩くバイタリティあふれる女性訪問販売業者）からピーナッツや干物を買う。外部ライターが打ち合わせや原稿をもって会社にくると、その場で干物で酒盛りか、飲み屋に直行。社員旅行で伊豆の有名旅館に泊まれば、宴会で騒ぎ出し、襖を蹴破ったり、女湯をのぞいたり、値段のはる鯉の泳ぐ池に飛び込むなどの乱暴狼藉。後からその旅館からかなりの修理代の請求がきて心当たりあるものは上司と経理からしぼられる。パンカラ（※この言葉は今は死語）男子校の延長みたいな雰囲気だった。ふと思い出す。高校の文化祭でどっかのクラブが野犬を捕まえて解剖、すき焼きにしてみましたといううわさがあった。真実のほどは定かではない。半世紀前の話。

マスコミに強い大学

勤務先のような出版社には大学の文学部を出て、大手出版社をめざして、それに失敗。やむなく出版社ならどこでもいいと入る人もいた。勤務先の出版するのは自動車、オートバイの本。そのこと自体には興味がない社員もいた。編集の仕事は文芸誌だろうと趣味の本だろうと教科書だろうと原稿を仕上げ整理して印刷所に渡すという流れは共通している。ジャンルの違う出版社にいても基本は同じ。でも、その世界に興味をもった方がいいのも確かだ。子供が好きな方が小学校教師に向いている。私は勤務先の出している本は大学時代から読んでおり、それが入社試験を通過できた要因でもあった。よくいわれることであるが、マスコミ関係は早稲田大学出身が多いというのは事実。私の勤務先もどのセクションにも1名は同大学出の方がいた。それどころか、8名のセクションで半数は同大出身ということも体験。同じ大学出身といえ、彼らは群れることはなかった。これは1学年で4、5千人はいるマンモス大学ゆえか、同大の特性か各個人の気質かはわからない。私は大学、高校ともに後輩はなし。同族経営で別の出版社には高校後輩がいた。社長一族は慶応大学出が多いようだ。社員でも少しいた。宴会などでその人はわーい、社長の学閥だ、いいなあ、と皆にからかわれていた。

営業と現場の戦い

カードゲームに関しては編集長まで参加することもあった。それには理由がある。夜間の印刷所からの校正の受け取り待ちである。それがいつになるかわからないので、常に待機体制だった。現在なら、電子メールで片付くが、当時は印刷所の営業が現場から校正を受け取ると、タクシーや社用車で当社に持ってきて、「赤入れ」してまた市ヶ谷や小石川の印刷所の現場に戻る。最終的には「出張校正」といって、印刷所に出向いて、校正を行う。この時、校正用紙が「赤入れ」で真っ赤になってしまうこともある。そうなるのと、今度は印刷所の営業と現場でこんなのとでもできないよ、お願いしますの押し問答の戦いが始まる。こちらは神妙な顔してみている。あとで、現場の方へと御迷惑おかけしましたと一升瓶の差し入れが慣例。

営業と現場の葛藤といえば、出版社では編集と広告の対立がある。編集は無料で記事としてあつかうのに広告は本に載せると掲載料金をいただく。同じところ（メーカー、販売店、用品店など）に訪問する場合、編集と広告では相手側の扱いが異なる。編集側としては、いくら広告主であっても、記事としてあつかう必然性がない場合もある。私は両方のセクションを経験したので、お互いの立場はわかる。私の勤務先みたいな自動車専門誌では毎月、メーカーからの多くの広告が入るし、取材先としてメーカーとの関係は重要。取材の車、バイクはメーカーからの貸し出し車両を使う。もちろん、無料である。編集長クラスになると、取材に使うことなく、モニターとして長期使用ということで高級車を提供されることもあった。これも無料。さすがに燃料代は自分で払ったようだ。そこで昔を思い出す。あの××変種町、いや編集長は無料提供車の日常使用ガソリン代のレシートを取材費の中にいれていたようだ。まあこれは運転自体がいつでも仕事につながるという理屈もあげられる。某H社から借りた高級スポーツカーで某役員が高速道路をドライブ。ハンドル操作を誤り、側壁に激突して1000万円の車が大破。さすが高級車、運転者は無傷だった。この事故はごく一部だけの社内秘のほずであった。でも、なぜかみんな知っている。これが会社だ。

バブル経済絶頂期の好景気のころ、メーカーはヨーロッパやアメリカでの新車発表もしばしば行った。雑誌記者などは「あごあしつき」で現地ご招待である。それでメーカー側に厳しい記事はどこまで書けるか。そのあたりは、能力ある記者は表現に工夫をこらす。現在はメーカー側からみれば雑誌媒体の価値は低下しており、前述のような無料貸与車両、海外での発表はないだろう。メーカーはテレビ、インターネット、イベントなどに宣伝戦略の重点をおき、雑誌はほっといても宣伝してくれるくらいの存在とみているようだ。

オーナー経営者の実態

出版社というのは講談社、小学館など大手は10社くらいで、あとの多くは従業員100人以下の小規模の個人経営会社である。出版自体は資金とやる気とテーマ、そのテーマの筆者を確保できれば一人でもできる。実際に専門書の世界では一人で運営している出版社も存在している。世間的に名前が知られている割には、出版業界の規模は大きくはない。出版業界全体でも働いている人の数は2万8千人と小さな町や大企業の一つの工場の人数より少ない。これは現在、私が受給している出版厚生年金の支払い加入者の数である。

私が入社する前の昔話。我が社の2代目社長、ライバルの同規模会社の社長などと昼から麻雀。これがかけ麻雀。手持ちがなくなると経理に電話して、社員にそこまでお金を届けさせたそう。昼休みに食事をとりにいくよと横浜の中華街までドライブしてきた編集スタッフもいたという。実にのんびりした時代だった。私たちのころも昼飯に歩いて30分ほどの東銀座のインド料理店までいったということもあった。社長は経営者としてのセンスは確かによかったようで経済界の中心の方々とのつきあいもあったようだ。20年位前、平日の休みをとった日、夕方のラジオ番組でこの方が出演なされていたのをたまたま聞いた。ラジオ

であり時間帯からみて聞いている社員はいないと思ったのか「社員は金魚鉢のなかの金魚みたいなもの。適当にエサをあげていればいい」と極めて率直なことをお話していた。おいしいエサであったのは確かだったけど。

入社後、島根県出身で中央大学出の先輩が声をかけてくれた「おい、須藤、おれはおまえの大学に支援にいった。でも、高崎駅で警官隊に押し戻されてしまったんだ。ごめんな」この先輩などを中心として翌年、労働組合が結成された。それにこりたのか会社側は新卒学生採用基準として、地方出身の下宿暮らしで元気で自由奔放なタイプから東京近郊在住の裕福な親元から通うおとなしいおぼっちゃんタイプに変えてしまったようだ。

1970年代当時、労働組合が強いのは小学館、平凡出版（現在のマガジンハウス）のような儲かっている会社だった。私たちも銀座にある平凡出版社の労働組合に歩いていき、組合の作り方の指導を受けた。おかげで当時は確かに給料、ボーナス（組合用語では一時金）そして売り上げで業界でも上位であった。

新橋の飲み屋街の近く

ともかくも1970年から80年代は社会も企業も元気で自動車、オートバイ業界は新車ラッシュ。本もいっぱい売れた。当時のスーパーカーブームの時など、小学生が会社にスーパーカーの写真くださいと押しかけてきた。勤務先から歩いて7、8分のところはサラリーマンのメッカ、新橋飲み屋街である。新橋駅前のサラリーマンインタビューは今でもテレビでよくみるシーンである。先の先輩などは、新橋の酒場で他の出版社（※徳間書店だったと思う）の人と喧嘩さわぎ。私も酒場に入り浸り。毎日、安酒場をはしご酒。銀座も歩いていけるけど、そちらの酒場には一度もいっていない。このあたりの話は、このページではとてもおさまらないのでカット。

香川県の香川さん

2000年になると、出版業界はじり貧状態。これはだれでも実感していると思う。かつてはどの町にもあった小さな本屋さんは絶滅状態。大手チェーン店も採算ベースにのらないと、2、3年で支店は閉店。つい最近も最寄り駅のツタヤが撤退。私は最終的には総務勤務であり、電話で地方書店の方からの雑誌注文を聞くこともあった。その時先方が話すのは、本が売れないという愚痴ばかり。勤務先も業務縮小で、現在、社員は40名とピーク時の半分。それでも私が携わった本は後輩達のがんばりで健在。今でも本屋さん図書館に並んでいる。私は60歳で定年。私より10歳くらい若い後輩の人たちは定年に達しないまま50代で、やめさせられたようだ。

私の勤務先から歩いて5分ほどの別ジャンルの専門誌出版社に在籍していたのが103番に登場の2年先輩の香川さんである。香川さんとは通勤利用駅も同じの都営三田線御成門駅である。ときたま、そこで顔をあわせることもあった。退職後の最近、メールをいただいた。お元気で活動しているようだ。香川県出身の香川さん、覚えやすい名前だ。

特養老人ホームにて

2年前に始めたのが「聞き書き」のボランティアだ。これはお年寄りから話を聞いてワードで小冊子にまとめて差し上げる活動。有名芸能人の個人史を得意としているプロ作家の方が地元公民館で聞き書き講座を行い、それを受講しその受講生でグループを作った。現在、14名が活動中、男は私を含めて2名、あとは女性。指導作家の方はあちこちでその講座を行っており、それらの講座受講生を集めての交流会、飲み会というのも都内でときたま開催される。そこも女性ばかり。8月の会では40名が集まり、男は4名。女性は私の子供くらいの年齢から60代まで幅広い。聞き書きは「介護ボランティア」の一環である。このようなボランティア活動は女性が多く、同世代の男性は少ない。聞き書きの前には私は「傾聴」の講座も受講して、実際に特養老人ホームを訪問。認知症の80代お年寄りの方から「息子が来た」と抱きつかれてしまった。これは重い。ただ、話を聞くだけの傾聴はきつい。それに対して、「聞き書き」は相手の様子をみながら、お話をしていただき、それをその方の言葉でまとめていくので傾聴みたいな圧迫感はない。指導作家の方がいうには、学生時代に国語で5の成績を取った人には向いていない。文章をきれいにまとめるのでは

なく、その人のいう言葉そのものを文字にすること。作文能力より素直さである。

パソコンに魅せられて30年

聞き書きとは別に私は15年前からパソコン（ワード、エクセル）講師を地元公民館で行っている。市の主催する初心者向けの講習である。雑誌編集という仕事を職業としたので、原稿、写真の整理、文字の種類（フォント）に字間、行間、見出しの決め方、見やすい紙面、校正という作業が「素人」よりは身につけているのでワードで小冊子を作る際にも役立っている。30年前からパソコンの魅力（魔力）にとりつかれ、これまで20台以上を使い、今も手持ちは5台。1990年前後、インターネット登場前の「パソコン通信」の時代、身辺雑記や、趣味の話などを大量に「ニフティフォーラム」にアップした。当時、それらをワープロで書き直して、冊子にして知人に配った。それは台紙にワープロ文を切り取り貼り付けてコピーしたものだ。あのころのパソコンの性能は実に低くまともなレイアウトができなかった。それを現在、レイアウト機能のアップしたワードで整理している。まとまれば400ページ近くの個人雑誌になる。とても1冊にまとまる量ではない。ホチキスで留められない。10冊に分ける予定。

現在、聞き書きグループのHP開設を私が担当で計画中。グループリーダーの**おばちゃん**（私より若い）からはいつになったらできるのか、と会う度に圧力をかけられている。WINDOWS95が出たころに簡単なHPを作成したことがある。HPを作るのはそれ以来である。この文がアップされるまでに間に合えば、そのアドレスは紹介できる。パソコンの話、それに出版業界に1980年代から導入されたDTPとそれに使用するアップル社マッキントッシュの話も長くなってしまっているのでカット。ひとつだけあげる。私はマックが登場したころ、アップル2GSというマックのベースとなったパソコンを秋葉原で購入。1985年くらいだった。価格は35万円。取説はもとよりパーツ、ソフトまで、すべて英文のみである。ソフトはほとんど国内になく、アメリカの専門誌の広告をみて直接注文。悪戦苦闘の末、3年後に手放した。1989年にNECの初代98ノート購入。当時のMS-DOS3.0の時代から現在までWINDOWSである。ビル・ゲイツさんちの豪邸の庭の樹木1本くらいはMS社に払ったかな。

最後に、エディタについて

私はこの文を含めて、パソコン上の文章入力には「秀丸エディタ」を20年前から使用している。当時、編集者に限らず、作家、記者、学者など文章入力を主とする方々から支持されていたのがエディタである。秀丸エディタ最新バージョンは現在もネット上で入手できる。価格は4千円くらい。最終的にはワードで加工するが、秀丸エディタは思考しながら文章を作成するのに適したツールだと思う。アメリカ製ソフトの翻訳であり、もう勘弁してよといいたくなるくらいに多くの機能を詰め込んだ感のあるのがワード。秀丸はシンプルで文章作成に徹しており、安価で使いやすい。エディタは元来は、パソコンプログラムを作成するためのもので、それに日本語処理機能を加えたのだ。オートバイに喩えれば、ホンダスーパーカブとハーレーダヴィドソンみたいだ。どちらもエンジン付きの二輪車である。人間の移動手段の道具としては変わりない。あとはそれをどう使うかということだけだ。残念ながら、ハーレーはちょい乗りだけ。カブはかつての愛車であった。

平成28年

職活動は人との出会いなり

1992年卒 関口史人（神奈川県在住）

明けましておめでとうございます。

平成28年最初のリレー随想－さんせんの輪－を寄稿させていただきます。



☆東京三扇会の広報担当役員として、会の活動の2つの柱の一つである「就職活動支援」のお手伝いをさせて頂いておりますので、今回はそのことに触れさせていただきます。

☆自分の経験から言うと、「就活とは人との出会い」である。



平成4年卒業の私の就職活動はバブル経済後期に重なり、最後の売り手市場だった。大学でも沢山の企業が学内説明会を実施しており、有名企業が来ると当時一番大きな(?)9番教室には多くの学生が集まった。



私は高校までは理系クラスに在籍し、大学で都市計画を学びたいと考えていたが、夢破れて文転し経大に進学した。そんな過去もあり希望就職先は迷わず建設会社だった。4年生のGW明けに、

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

に春に入社したばかりのOBによる学内企業説明会があり、たまたま参加した。
(後にも先にも説明会の参加はこの1社だった。)OBが活躍する会社だと知り、



興味を持ってOB訪問を申し込んだ。自分も含めて経大生4人のOB訪問を受けて下さったのはリクルーターで30歳過ぎの先輩だった。学生の拙い質問に真摯に答えて下さったことに加え、建設会社の仕事の社会的意義、バブル後の展望、事務系社員の役割や、仕事のやりがいなどを熱く語って下さった。

そんな先輩の話聞いて、「興味のある会社」が「入りたい会社」に変わっていた。もっとこの会社のことを知りたいと思った。
その後、リクルーターの先輩からも学生たちに質問があり、大学での勉強のこと、学内活動や学外活動について4人が順に答えて行った。

高崎の下宿に戻ると部屋の留守番電話のメッセージを受信したことを示



すライトが点滅していた。「君と一緒に仕事をしたい。連絡をください。」

数時間前に東京で別れたリクルーターの先輩からのメッセージだった。その一言に私は舞い上がり、すぐに連絡を取った。こうして本格的な就活が始まった。清水建設に在籍する経大OBに会ってもらい短期間で色んな事を吸収していった。この先輩との出会いがなければ、今の自分は無い。

☆翻って、今の就職活動を行っている学生たちに対して、自分たちが受けたような環境は与えられているだろうか？私も本社勤務になってからリクルーターを引き継いだ。10数年前から「学内就活セミナー」

就職ガイダンス（対象：3年生）

就職活動で必ず必要となってくる筆記試験・企業研究・ESの書き方等について、学外から講師を招き、講演をしていただきます。

を開催しているのは、就活にITツールが活用され学生とOB・OGとの接点が希薄になってきたと危機感を持ったからだ。セミナーで学生たちにずっと言い続けているメッセージは2つで、「挑戦」しよう！そのために「周到な準備」をしよう！である。

各分野で活躍している経大のOB・OGに会って、



自分ならではの情報を得て、
自分の言葉でその会社の泥臭い志望理由を作ろう！

マウスをクリックするのは就活ではなく、情報が氾濫する今こそ、自ら動いて1次情報に触れる大切さを訴えている。そんな時、先輩たちに「うちに来い！」って言ってくれる先輩の会社は、きっと良い会社なのだと思うよ！そんな出会いを求めて就活してみてくださいはどうか？学生諸君！！

卒業して三年

2013年卒 田野伸午

皆さんこんにちは。2013年度卒、地域政策学部に所属していました田野伸午と申します。現在はゼネコンの前田建設工業㈱に勤務しています。今回は同じ建設業の大先輩でもある関口史人先輩からバトンを受け継ぎました。



思い起こせば就職活動が始まったばかりの3年生の12月。合同説明会に向かう路線バスの車窓から、北陸新幹線開業を控え再開発が進む故郷、金沢の景色を眺めるうち自分も街の再開発に関わりたいという気持ちが湧き、建設業を志望するようになりました。

前田建設に入社してからは宮城・福島県沿岸の震災復旧工事を担当しており、



各作業所の
経理・総務・労務などの事務作業に務めています。宮城県では石巻市の被災した病院の移転工事や仙台市の税関の復旧工事、福島県では檜葉町の除染工事など様々な工事現場の業務に関わらせていただきました。大

学卒業まで、東北に行く機会はなかったのですが、部活やゼミで多くの東北出身の同級生、先輩からそれぞれの地元について話を聞いていたので、卒業して東北のいろんな町を巡るたびに彼らの顔が浮かんできます。

学生最後の春休み、東北支店配属の辞令を受けとった時は、「被災地の復興に貢献するんだ。」と同級生に公言したものでした。しかし、新入社員として任せられた仕事はお茶くみや仮設トイレの掃除などの雑務が中心。地味な作業になかなか意味を見つけれない時期もありましたが、現場で働く職人さん達から感謝の言葉を頂くうち、自分の仕事も間接的に被災地の復興に繋がっているという自負が少しずつ生まれてきました。三年目になった今では、新入社員の頃より専門的な仕事にも関われるようになり、任せられる仕事も変わってきましたが、まだまだ日々不器用に悪戦苦闘しながら仕事に取り組んでいます。

呑み込みが遅く要領が悪い私は、人より成長は緩やかかもしれません。しかし、思い起こせば大学時代のほとんどを捧げた吹奏楽部でも、同じように部内一の下手くそから、最後に県大会の金賞を頂くまでになりました。高経で過ごした4年間を胸に、将来は全国の様々な地方都市の再開発事業に携われることを夢見て、この東北で日々勉強させて頂いています。

地球2周半

2009年卒 寺田 悠紀

第158回さんさんの輪のランナーを仰せつかりました、2009年経済学部経営学科卒の寺田です。この3月で卒業からちょうど7年となり、同時に今の会社生活も8年目に入ろうとしております。

8年目の社員ともなれば、そろそろ中堅どころと呼ばれるような存在であり、後輩に仕事の指導をしつつ自身は更なるレベルアップ・・・という役割を担っているものです。私もその例にもれず日々苦心しております

私は学生時代、先輩に車を譲ってもらったことをきっかけに日本全国を駆け巡るドライブが趣味になりました。大学在学中に通学除いて10万km走った高経生など、過去にも今にも私くらいではないかと思っております。在学中にマイカーで47都道府県を訪れる夢はついにはかないませんが(沖縄はレンタカー)でしたが、そんな趣味が高じて(?)大学卒業後は高速道路に携わる仕事に就きました。よく「趣味と仕事は一緒にしてはいけない」と言われるものですが、私に関しては自分の興味のあることを仕事にできるのは幸せなことだなと感じて、日々励んでおります。仕事の合間にドライブ(ドライブの合間に仕事?)は欠かさず続けており、先日は、生涯走行距離が地球~月間(約38万km)に達しました。我ながらよくやるな・・・と思うところです。

在学中は吹奏楽部に所属しておりました。吹奏楽部の部室には「徒然ノート」という、旅行の記録をみんなで書きあうノートがありました。県内の遠方(草津とか水上とか)や、埼玉・長野・栃木といった近隣のプチ旅行ネタが中心だったのですが、私が異常なまでの旅行(中国四国九州全県を一度に行く、など・・・単なる強行軍)ネタを長々と書いていたせいで、ほぼ一冊私の記録で埋め尽くされた号もありました。申し訳ありません。今でもこのノート、続いているのでしょうか・・・?

この1月で30歳になり、段々体型に加齢が表れ始めたなど毎朝鏡を見ながら感じる毎日です。少しでも健康を維持できればと、週2回はスポーツジムで汗を流すようにしています。心身ともに健康を維持し、公私ともにいい生活を続けていきたいと思っております。 以上

「バッハもマーラーも、ラヴェルも、どれもいい！」

2009年卒 関戸 彰久

159番目のランナーを仰せつかりました2009年地域政策学部卒の関戸彰久と申します。現在はインフラ企業の販売部門に従事しています。

学生時代は、吹奏楽部の副指揮役やNPO法人の運営、学童ボランティアの参画、教育実習など得難い経験を数多くしました。まわりの仲間から様々な刺激を受けた4年間でもありました。刺激という点で言いますと、私は、中学生時代からこれまでクラシック音楽を聴き、数多くの楽曲から影響を受けてきました。この手紙、学生時代のホルン演奏に始まり現在もアマチュアオケに所属、また趣味のピアノ演奏等々につながっております。

本日は、この場を借りて私が社会人以降に”はまった”クラシック音楽を紹介します。

(1) JSバッハ(1685-1750) ゴールドベルク変奏曲BWV988

バッハは、音楽が感情表現だけではなく、論理や形式に基づく構造物であると教えてくれた作曲家です。チェンバロで演奏されるこの曲は、数字の「3」がキーワード。主題のアリアを30の変奏曲に展開、しかも展開する曲は3の倍数で3曲1セット。厳格なフーガ(メロディの追いかっこ)や左右のメロディの受け渡しなど、厳密に書かれた楽譜から楽譜から現れる旋律に驚愕しました。

クラシック音楽を紹介します。

★おすすめ演奏家: アンドラーシュ・シフ

(2) グスタフ マーラー(1860-1911) 交響曲第5番 嬰ハ短調

マーラーは、私にとって全く新しい作曲家です。オーケストラから聴こえる響きが他の作曲家と全く違う。第5番は、マーラー絶頂期に書かれ、悲劇的な楽章やウイーン風舞曲の3楽章、甘美な4楽章など聴き所が満載の一曲です。

★おすすめ演奏家: サイモン・ラトル指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(3) モーリス・ラベル(1875-1937) 夜のガスパール

ラヴェルの楽曲中、「一線を画す」謎のピアノ曲。不気味で幻想的な旋律や急速に変化する弱点、テンポが特徴で、世にあるピアノ曲の中でも最高難度の曲です。ユーゴスラビア出身の若きボゴレリチの演奏映像を見たときは衝撃を受けました。

★おすすめ演奏家: イーヴォ・ボコレリチ

春の季節、皆さまも時にはクラシック音楽に耳を傾けてはいかがでしょうか。

余談ですが、私が所属する清水フィルハーモニー管弦楽団(静岡市清水区)が6月19日(日)に定期演奏会を開催します。興味ある方は、ぜひ会場に足をお運びください。

(<http://www.shimizu-phll.com/>) !!!

子育ては自分育て

2009年卒 須田 有貴

ゼミで苦楽を共にした関戸くんからバトンを託され、160回目のリレー随想を担当させていただき須田有貴と申します。

2009年に地域政策学部を卒業し、仕事の都合で埼玉、新潟へ異動し…結婚、長男の誕生を機に地元群馬に戻ってきて4年半になりました。

卒業後、間も無く子育てがスタートした私は、それまでの自分中心の生活とは全く異なる日々に戸惑い、着々とキャリアを重ねる友人たちと自分の状況を勝手に比較して焦ることも多くありました。

《子育ては自分育て》ともいう通り、思い通りにいかないことの連続です。我が子といえど、別の人間。生まれたばかりの頃は睡眠のサイクルが定まらず、何をしても泣き止まない夜に途方に暮れたことも。

歩き出す頃には自己主張をするようになり、親の行きたい方向とは正反対に所構わず突き進む。

こちらが急いでいる時なんて、尚更言うことを聞いてくれないものです。

喋り出す頃には第一次反抗期。何を言っても首を振って「いや！」しか言わない。ショッピングモールのおもちゃ売場に迷い込んでしまったら出られなくなり、目的の買いものすらできずにヘトヘトで帰宅することも。

この他にも上手くいかないトイレトレーニングや食べ物の好き嫌いの克服…予想以上に次から次へと新しいチャレンジを与えてくれます。

幼い子どもには、大声で怒っても全く無意味。

ただ親が体力を無駄に消費し、自己嫌悪に陥るだけでした。

私自身、何度も失敗して自己嫌悪に陥った経験を踏まえて〈自分の感情を抑えて、まずは子どもの気持ちに寄り添うことが最善策〉と学びました。

そんな我が子と日々向き合うことで、短気だった私が（少しは）寛容になれたし、いつも時間ギリギリ行動だった私が、時間に余裕を持って行動をするようになりました。

浪費家だった私が、子どものためにお金を大切にするようにもなりました。

そして、何よりも両親に心から感謝できるようになりました。

たくさんの手間をかけて、

たくさん愛情をかけて、

たくさんのお金をかけて、

必死に育ててくれたんだと自分が子育てをする側になってやっと分かりました。

未熟な私は、我が子に出会って本当にたくさんのことを教えてもらいました。

「誰かと比べるのではなく、自分と家族が満足できる暮らしがあれば良い。」

そう思えるようになったら、子育て中で思い通りに働けない自分への焦りや、社会から取り残されているような不安もいつの間にか感じなくなりました。

そしてこの春から、近くの幼稚園で事務として働き始めました。慣れない仕事に悪戦苦闘する毎日ですが、可愛い子どもたちに囲まれた幸せな仕事です。

《子育てと仕事の両立》という新たなチャレンジに、私なりに楽しく立ち向かっていきたいと思います。

以上

”憧れ”を大切に

2008年卒 今野 健史

英語研究部（E. S. S.）の後輩からパトンを託されました。161回目のリレー随想を担当させていただく今野健史です。現在は地元である岩手県奥州市というところで、中学校で英語科の教員として働いています。

大学の先輩や後輩に、学校の先生をしていることを告げると、よく「社会科ではないのか」と聞かれます。私の場合、学生時代に教員免許を取っておらず、社会人になってから教員の道を志したこともあり、大学でサークル活動していた英語科で免許を取ろうと決めました。新卒で入った会社を4年で辞め、学生に戻って約3年、ようやく免許を取得できました。同時に地元岩手の教員採用試験にも合格し、去年から奥州市の中学校で働いています。このように紆余曲折があったため、「社会人〇年目になりました」とすぐには出てこないのが困りものです。

こうして無事に教員になることができたのですが、今こうして学校現場で働いていることを、時々不思議に思うことがあります。そして「夢は変わるものだなあ」としみじみ思います。

私が中学生だった頃、この職業にだけは就かないだろうと決めていた仕事がありました。それは「中学校の先生」でした。はっきりと将来の夢があったわけではありませんが「学校の先生だけは絶対にやらない」そう思っていました。元気いっぱいの中学生を相手に、毎日指導に明け暮れるも、素直にいかないのが中学

生。気持ちを込めて叱っても、言えば言うほど嫌われていく…。子どもながらに「こんな割に合わない仕事はないな」なんて思っていたのです。

そんなことを思っていたのに、今自分がその仕事に就いているのだから驚きです。2011年の震災の後、地元に戻って何かをしたいと思うようになったこと。サークルの後輩の成長を見て、人を育てる仕事に魅力を感じたこと。ずっと好きで勉強を続けていた英語。いろんな要素がちょうど重なって、現在の選択につながったのかなと思っています。”Connecting the Dots”を、少しでも自分なりに感じています。

昨年は1年目だったので、初任者研修というものがありました。その年の採用者が一同に集まったの研修なのですが、その研修を担当していたのが、なんと私の中学2・3年の担任の恩師でした。成人式以来の再会で、約10年ぶり。教員を目指していることや、試験に合格した時も報告はしていたのですが、会って報告することができ、昔の話をできたのはとても幸せでした。「まさかお前が先生になるなんて」とも言われましたが、「本当にそうです」と笑って返しました。

絶対にならないと決めていた職業に今就いているのですから、人生わからない…。いま生徒たちに思うのは「夢は変わっていい。でも今、その時の”憧れ”を大切にしてほしい」ということです。行きたい高校、将来の職業、チャレンジしたいこと。何でもいいのですが、心の中にある”憧れ”が一番エネルギーを引き出してくれるのかなと感じています。それをひとりひとりが見つけられるように、日々生徒たちと関わっていきたいと思っています。

スタートラインに立って2年目。まだまだ苦労も多いですが、何年後か、いつか教え子たちと昔話ができる日を夢見てがんばっていきます。

東京から遠野へ 過渡期を生きる

2009年卒 富川 岳

ひとつ上の尊敬する先輩からバトンを託されました。162回目のリレー随想を担当させていただく富川岳です。現在、大学卒業後に7年間住んだ東京を離れ、この4月から岩手県遠野市に移住し、プロジェクトの立ち上げに奮闘する日々を送っています。

このプロジェクトは、地域の資源と起業家、企業、行政をコラボレートさせ、その場に新たな産業やコミュニティを生み出すことを目的としている、Next Commons Lab (<http://nextcommonslib.jp/>) というものです。今年、第一弾のフィールドパートナーとして遠野で、ビール、発酵、子育て、デザイン、住宅など10のプロジェクトを用意し、そこに起業家候補を募集して彼らを3年間インキュベーターしながら事業を支援していきます。立ち上げの経緯としては、近年の、人材の都心部への一極集中や地方のコミュニティの形骸化などを問題意識としており、”田舎で暮らしたい”と行った牧歌的なものではなく、自分のやりたいことができるプラットフォームといった部分で興味を持ってもらい、志ある人材が地域へ入っていく流れを作ろうとしています。現在、私はこのプロジェクトの共同創業メンバー・運営事務局として日々様々な準備を行っていますが、魅力的な方々が集まってきており、これからがとても楽しみです。さて、ここまで書くにあたかもスムーズに移住を決めたように思えますが、7年間働いた広告業界は魅力的な方々がたくさんいましたし、音楽や映画、イベントなど都会のエンターテイメントを中心とした刺激的な生活も楽しく、思い切って馴染みのない場所へ拠点を移すことは心理的ハードルもありました。ただ、もともと地域に埋もれている人や場所、モノ・コトを顕在化させる仕事をしたいと思い続けていましたので(卒論のテーマも『地域におけるデザインの力』でした)、来年30歳を迎える今、思い切って地域に入り込みチャレンジすることを決断しました。

4月に遠野にきまして、たくさんの友人が遊びに来てくれています。よく「地域での仕事や生活はどう？」と質問されますが、これまでの広告業界の経験を生かせる仕事もあれば、市民大学や養豚事業などの全く異

なる領域の立ち上げや、写真&ライティングなどこれまで趣味でやっていたものを仕事として取り組むなど、これまで使ってこなかった筋肉を鍛え続けている感じがしています。自分の至らないところも日々感じますが、これまでとは異なることにチャレンジしたくて遠野に来たので、必死に生きる後にどこかで自分の成長を感じるものだと信じ、前を向いて走っています。今年、お世話になった大学のゼミもいろいろと変化があるようで、まさに過渡期だと感じる人が多いですが、大学時代に出会った言葉「できるできないじゃない。やるんだ。」の精神で、この先おこるであろう仕事・生活面の変化も攻めの姿勢を忘れず、楽しみながら生活できればと思います。それでは、今後、数年間の遠野の変化をぜひご期待ください。

変化を起こす力

2008年卒 小野 潤一郎

163番目のランナー、小野潤一郎です。佐々木ゼミの後輩・富川君よりバトンを受け取りました。学生時代はサッカーサークルを設立し、佐々木ゼミではマーケティングの勉強をし、回転寿司屋と家庭教師のバイトをしていました。

今回選んだテーマ『変化を起こす力』は、特にそれが何かということを断定するつもりはありません。ただ、その源となる力の増幅装置として共通するものがあると感じています。

“変化”という言葉だけでは、様々なレベルのものを連想することができます。例えば、「明日からランニングを日課にしよう!」とか「今度A社にこんな提案をしてみよう!」など個人の上に発生する変化です。それとは対照的なものは、“サークルの方針を変える”とか“無人運転の自動車を走らせる”など複数人の能力を掛け合わせた結果が“変化”になるものです。

つまり“変化”のスケール感や影響度は、自分自身を含めた“それ”に関係したメンバーすべてのかけ合わせた結果によって決まります。掛け合わせるのですから、時にはマイナスに転じてしまうこともあるでしょう。要するに、①まずはプラスの結果に誘導し、②それをより大きなプラスへと誘導する、このことの大事さが今回のテーマです。そして、それを実現するために必要な能力はそんなに大それたものではないと考えています。

社会人となり、いくつもの変化に立ち会い、また変化を起こしてきました。自動運転車両の導入、スマートフォンコンテンツの導入、ソーシャルメディアへの所属企業の適用、所属企業のM&A…etc

現在、自動運転車両の導入や自動運転車両と連携する交通サービスの導入を推進しています。各メディアで取り上げられている通り、人命にも関わる重大で、且つ大きな変化です。これが、ただ電車・バスと並んで少しだけ便利になるのか、高齢化が進む過疎地域で有効な移動手段となるか、子供や親族の代わりに買い物などの用事を済ますための手段となるのか、またそのスピード感を加速させることができるのか、そのためにはどんなものが必要でしょうか。立場を越えて政府・自治体・企業が同じビジョンを描いて進めるのか、前例の無いケースに企業・プロジェクトチームが協力して取り組めるのか、そもそもそれらをまとめる推進・コミュニケーション力が不足していないか…。

目の前に起きる変化を、より（スケールの大きな）プラスになる何かに誘導できると、数年後にはそれが大きな変化に成長している、かも知れないですね。

囲碁の授業

2008年卒 乾 智美

164番目のランナーとなりました、乾 智美です。
大学卒業後は都内のシステムベンダー2社に勤務し、現在は主婦をしています。

先日の上毛新聞ニュースで、高経が2017年度からプロ棋士による囲碁の授業を導入すると知りました。授業の講師は伊勢崎市出身のプロ棋士である三谷哲也七段が務め、少人数のゼミ形式で行われます。目的は、論理的思考や大局観を身に付けさせることだそうです。このニュースを知って、心から羨ましいと思いました。私が学生だったら絶対に受講します。なぜなら、論理的思考や大局観の大切さを今になってしみじみ実感しており、可能なら大学生よりも前の、ずっとずっと幼い時から身につけておきたかったと思

う能力だからです。

高校までは、どちらかと言えば両親や学校の先生の導きのもとでの生活です。

しかし、大学からは急に世界が変わります。

授業、アルバイト、ゼミ、就職先など、自分で選択し責任を持つことが増えます。

答えの決まっていない中、今の自分や周囲の状態を念頭に置いて、トライ&エラーを繰り返さなければいけません。

論理的思考や大局観が身につけていけば、目の前の欲求に振り回されずに、落ち着いて思考することが出来るでしょう。もしあの時その能力があったら違う選択をしていた、と思うことは多いです。後悔を今後しないためにも、30歳をこえた今、習慣にしていることがあります。それは、将棋の詰将棋を解くことです。囲碁と同様に、将棋も論理的思考や大局観を向上できます。思い立った時に遅すぎるという事はありません。囲碁はまだルールも知らないのですが、早く勉強したいと思っています。

現役生の皆さんには、まずは気軽な気持ちで、囲碁に興味を持つことから始めてほしいです。そして、可能なら受講をお勧め致します。

IT に触れて

2016年 坂部 卓哉

165番目のランナーとなりました、坂部 卓哉です。
今春に学部を卒業し、都内のITベンダーに務め始めました。

私がIT業界に興味を持った理由は、人工知能技術に可能性を感じたからです。

人工知能と聞いて、皆様はどんなイメージを持つでしょうか。『何でも出来る万能の機械』『やがて人間を脅かすもの』『創作SFの世界にしか存在しないもの』などが多いかもしれません。私自身も、詳しく調べるまでは上記のようなイメージを持っていました。しかし今は、そのどれもが間違いであると断言できます。現在の人工知能（厳密にはその種類も多岐に渡りますが、便宜上一括りにします）を一言で表すならば、人間の子どもです。

私が就職した企業も人工知能技術を活用したサービスを展開しています。そこに興味を持って入社を決めたということもあって、新入社員でもチャレンジできるイベントを活用し、実際に人工知能技術を用いたアプリケーションを作成しました。実際に触れて分かったのは、人工知能はとても手が掛かるということです。

人工知能と従来のコンピューター・システムとの差異は、自然言語（我々が日常的に使う言葉）を理解し、その意図を学習できる点にあります。学習。これがキーワードです。意外に思われるかもしれませんが、人工知能を活用するためには、まず『教える』という作業が必要なのです。最初から何でも出来るわけではありません。しかし、良質な教育さえできれば、今までになかった未来に辿り着けます。そういった面から、人間の子どもであると表現しました。

最後に、活用事例をひとつだけご紹介します。先日、人間では読み切れない量の医学論文を読み込んだ人工知能が、医師も気付かなかった病気と療法を指摘して患者の命を救ったという事例が国内で出ました。この事例は、人工知能の良さを端的に表していると私は考えています。人間では辿り着けなかった見地に至り、人間を助けたということです。

人工知能に欲はないので、人間を支配しようとするなんてことはありません。不気味に思っただけ敬遠するのではなく、きちんと知って、活用する。それがこれからの人生を豊かにするひとつのコツだと、私は考えています。

166番目のランナーになりました、2016年卒の小池雅樹です。大学時代、同じ団体に活動していた坂部くんからバトンを引き継ぎました。今年の3月に卒業し、社会人になってから怒涛の毎日を過ごしてきて、もう後輩たちが卒論や卒業の話をしているのを聞くと、あつというまだな、と感じています。

何を書こうか悩んでいましたが、卒論でも少しかじっていたリーダーシップについて書こうと思います。

私は在学中、「cafe あすなろ」という高崎の中心市街地の活性化を目的としたコミュニティカフェの立ち上げに参画し、2期目の学生代表として活動していました。今振り返れば、大変なことだらけな印象ですが、毎日がとても充実していたのを覚えています。

そんな代表という自身にリーダーシップがなければやっていけない立場で活動しているなかで感じたことは、むしろ「ほかのメンバーにもっとリーダーシップを発揮してほしい」ということでした。一般的なリーダーシップには「何か特別な人が特別な状況下において発揮するもの」といったようなイメージがあるように思えます。「自分は大了たことはないから」とか「そんな人間ではないから」そんな声が、メンバーから聞こえるような気がしていました。私がリーダーシップについて興味を持ちだしたのは、そんなメンバーをどうしたらいいのか、という悩みがきっかけだったように思います。

そうしている中で、自分なりにリーダーシップを調べているうちに、1つの考え方にたどり着きました。それは「インスピレーション・リーダーシップ」という考え方です。詳しい内容は省略しますが、とある企業コンサルタント会社が生み出したもので、「やりがい」の正体は何なのか、という点に着目した考え方でした。いくつものコンサル経験の中から、「やりがい」の招待は「感動体験の量」であり、やりがいを増やすために、感動体験をいかに作り出していか、という目的ををリーダーシップという手段を用いて作られたものでした。

わかりやすく言うと、個々人が自分にできるリーダーシップを発揮し、周囲の人に「感動体験」を作り出すことができる組織をつくるのが「インスピレーション・リーダーシップ」です。「あの時、この人の一言があったから頑張れた」「普段は静かだけど、この人の雰囲気はチームを和ませてくれる」そんないままでのリーダーシップでは語られなかった些細なことが、組織を活性化させているのです。組織に完全なリーダーが現れるのを待つのではなく、それぞれのメンバーが自分にできるリーダーシップを「発揮していく」ことが重要であり、そうしたことを承認してくれる組織を作ることが大切なことであるとしています。

この考え方と出会ったとき、「これだ！」と直感しました。過去を振り返ってみて、ターニングポイントや印象深い思い出はいつもこんな場面だったように思います。実際の活動期間が2年半ほどの学生団体において、この考え方を組織に根付かせることは難しく、毎年同じような課題に直面しているのが学生団体の宿命なのですが。

自分にできることを相手に対して還元していく。それは社会人になった今でも、忘れず人生の中で生かしていくことができる「気づき」であったと思います。

平成29年

遊ぶ門には福来る

2016年卒 小坂橋 稔真

明けましておめでとうございます。167番目のランナー、そして2017年最初のランナーとなりました2016年卒の小坂橋稔真と申します。

趣味は漫画やアニメ、ゲームとインドアなものが多いです。また、最近では御朱印集めや街歩きのようなアウトドアの趣味も楽しんでいます。お酒も好きでよく飲みます。しかし、先日記憶とお財布を無くす酩酊状態になってしまい少し自粛中です。皆様もお酒にはお気を付けください。

さて、そんな私が今回のランナーを務めさせて頂きます。今回は『遊ぶ』という言葉テーマに文章を書いていきたいと思います。「どうして『遊ぶ』なのか、何か理由があるのか」と考える方もいるかもしれませんが。しかし、そんな深い理由はございません。年初めですし、小難しいことはなしでいこうと思ったからです。

皆様は『遊ぶ』というフレーズでどんなことを思い浮かべますか。例えば、いま嵌っている趣味などでしょうか。私は上記した趣味のゲームや漫画、また友人たちとの飲み会などを思い浮かべます。今の社会は娯楽が溢れているので、他にもいろんな遊びがあると思います。

どんな内容でも『遊び』について考えている時間は楽しいものです。仕事や日常で苦しいことがあっても、その苦しみを和らげてくれます。だからこそ、今年の年初めは『遊ぶ』ことを考えて過ごしていくつもりです。自分が楽しくないと誰かを楽しませることもできませんから。

御朱印を集めてみたり、ダーツの旅みたいなの街歩きをしたり、人狼で遊ぶイベントやったりとやりたいことは尽きません。たくさん遊んで、たくさん楽しんで、たくさん笑う。2017年はそのように意識を高く持って過ごしていきます。あと後輩もできるので、お仕事もほどほどに頑張ります。

『遊ぶ』をテーマにメッセージを書くつもりが、2017年の自分の過ごし方の話になってしまいました。つまり、言いたいことを簡潔にまとめると、『皆様も楽しく遊んで、良い一年にしてください』ということです。

相棒たち

2016年卒 栗原 大起

168番目のランナーとなりました、2016年卒の栗原大起です。大学時代の親友、こいちゃんこと小坂橋君からバトンを引き継ぎました。振り返ってみると、去年の今頃は卒業単位が足りるか否かそわそわしていたのですから、月日の流れの早さを感じます。

さて、何を書こうかと思案しているうちに締切がぎりぎりになってしまい、焦っております(笑)そこで、今回はわたくしの大学時代の愛車遍歴にお付き合いいただければと思います。

私は、学生時代はほぼ毎日バイクで通学していました。1年生のころは実家にあったスーパーカブでした。私が乗り出したころメーターは7万キロを指していましたが、父曰くメーターは2周目とのこと(すずに17万キロ…)。しかし、私より10歳年上とは思えないほど故障もなく、とても頑丈なバイクでした。さすがに片道50キロは体に堪える時もありましたが、何とか通っていました。それには理由がありました。なぜなら、原付は小回りが利くので、帰り道に古墳や古碑の見学に気軽に立ち寄ることができたのです。私はこの寄り道が楽しみでした。本音では高崎に下宿したいと切に願っていましたが…(笑)

次はカワサキ製の250ccのバイクでしたが、これは故障ばかりで大変でした。とは言ってもバイク屋さんに見てもらおうお金もないので、たびたび自分で修理をしていました。手間はかかったものの、私は幼いころからおもちゃや電化製品の分解が好きで、むしろバイクの修理を楽しんでいました。しかし、両親はモ

ノが大きくなっただけで20歳になってもやっていることは幼いころと何も変わっていないと嘆いていました(笑)。このバイクで暇を見つけては長野県や山梨県など、近県を回っていました。このころ、高崎のまちなかの事業のお手伝いをさせていただき、今の職業につながる私にとっての大きな刺激となりました。その関係でラジオ高崎に出演させていただいた時にも、このバイクの話をしました。とても貴重な体験でした。

大学4年生になり、ようやく4輪車を購入しました。群馬の誇る富士重工製のサンバーです。皆様は農家さんで見かけることが多いでしょうか。別名、「農道のボルシェ」と呼ばれています(笑)。トラブル知らずの丈夫な車で、いままで各所を訪ねました。はじめ、購入してすぐに伊勢神宮へと赴き、目的地の潮岬から太平洋を眺めて帰ってきました。社会人となった去年の夏は、鳴門海峡を越えて四国に渡り、広島、倉敷と瀬戸内を巡ってまいりました。こうして振り返ってみると、私はバイクや車によって徐々に自分の行動範囲を広げてきたと思います。

大学入学前は、高崎という場所すらよく知りませんでした。しかし、大学生活を通じて高崎というまちに携わることで、もっとたくさんの場所に行ってみたくて見聞を広めたいと強く感じるようになりました。その思いを叶えてくれた心強い相棒が紹介した自動車たちです。これから、公務に携わる者として、大学で得たものはもちろん自らの目で見て感じた事、考えたことを地域の未来のために生かしていきます！ まとまりませんが、そろそろバトンを次の方へ回そうと思います。次は大学時代の同期で、自動車趣味仲間の中澤くんです！ よろしく！

好きなこと・好きなもの

2016年卒 中澤 僚

169番目のランナーに大学時代の友人かつ自動車趣味仲間の栗原くん(くりちゃん)より、バトンをいただきました2016年地域政策学部卒の中澤僚です。あまり長い文章を書くのは得意ではないですが、頑張ってお返事をさせていただきます。期日ギリギリになっての提出をお許しください…。

ふと思えば、卒業からあつという間に一年が過ぎようとしていて、大学時代の自由な時間を懐かしむ日々を過ごしております。一年近く社会に出てみてわかったことは、社会人の息抜きは休日と趣味を思いっきり楽しむことなのではないでしょうか。そんなことで、趣味の話をしてはいかがでしょうか。タイトルの「好きなこと・好きなもの」は「趣味」です。

私の一つ目の趣味は自動車関係です。小さなころから、同じく車好きな父の後ろにくっついて洗車したり作業の手伝いをしたりしていたため、自然と車好きが遺伝したようです。そんな私だったので、入学後2か月で免許を取り、今まで父が乗っていたプジョーの「207」に乗ることとなりました。初心者が本格的に乗る車が輸入車というものなかなか無い話かと思いますが、家で空いていた車がマニュアル車ということもあり、初心者には厳しいということでこの車に乗ることとなりました。ハイオク指定で燃費もあまり良くない車でしたが、長距離でも疲れにくく、友人を乗せて榛名や草津、軽井沢、秩父、山梨などあちこちへ出かけたのも思い出の一つです。また、輸入車にありがちな大きな故障もなく2年半で3万キロほど乗りました。大学3年の終わり頃に乗り換えることとなりましたが、その際には今までの感謝を込めて隅々まで磨き上げました。

その後乗ることとなった車がダイハツの「コペン」です。軽自動車で二人乗りとだいぶ小さな車ですが、屋根が開くオープンカーなのでドライブに最適です。就活で県内各地へ行ったり、足を伸ばして大洗や流山、鎌倉、箱根、長野などへ出かけたりと今まで以上にフットワークが軽くなったかのように思います。

長くなってしまいましたが、車の話はこれくらいにしておいて、もう一つの趣味の旅行の話をしてはいかがでしょうか。先ほども述べたように、車であちこちへ出かけるのも好きですが、列車や飛行機、バスで行く旅も好きで、就活が終わり卒業間近になる頃には毎週どこかへ遠出していました。鈍行列車を乗り継ぎ6時間かけて富山へ行ったり、夜行バスを使って京都大阪旅行へ行ったり、サークルの卒業旅行では初めての海外旅行へ行ったり…とまさに「飛び回って」いました。就職してからも旅行好きは変わることなく、「コペン」で出かけるのはもちろん、週末や夏休みを駆使して大学時代の友人と弾丸旅行を企てたりしている日々です。

こうやって文章にして見てみると、とても当たり前のことかもしれませんが、趣味があるからこそ日々の

生活が充実するのであると感じました。大分長くなってしまったのでこの辺で切り上げます。ご指名ありがとうございました。

雑記

2016年卒 木村 裕希

お世話になります。

2016年度3月に無事に卒業しました木村裕希です。同期の中澤くんからのバトンということでこちらに書かせていただけることを光栄に思っております。同窓生といえども、過去の投稿記事を拝見させていただくと私がまだ生まれていないころに卒業なされた先輩方もこちらに投稿を寄せていらっしゃるから恐る恐る記事を書いているところです。

大学生の頃は自宅が群馬県沼田市ということで少し遠いですが電車や車で通学しておりました。教職課程と合わせて大学生生活を送っていたのでとにかく時間がなかった思い出が大学4年間を振り返った率直な感想です。

趣味ですが前執筆者の中澤くんと同じクルマ、更にはバイク、カメラや旅行など、まるで高経生の鑑のような存在でした。(笑)

バイクに乗っていると山奥で雨にふられ風邪を引いて帰ったり、駅でカメラを落下させてレンズを破壊してしまったりといろいろありましたが、それらも大学中の大切な思い出となっております。

大学の授業では、西野ゼミにて毎度叱られ、泣きながら電車に乗り帰宅すること、授業が終われば自宅通学だったので飲み会の途中で泣きながら同期生と別れ一人自宅へ向かうことなど、やっぱり振り返ると懐かしく感じられます。

現在は大学を卒業して群馬県で働いておりますが、高経生が大嫌いなあの職業です。もし会ってしましましたら、まず「私は高経生です!」と一言おっしゃってください。別ににも変わりません。(笑) 現在社員が足りないので絶賛募集中です。私と一緒に働きましょう。

いろいろ書きましたが、高崎経済大学を卒業することを出来たことは嬉しく、また群馬県人として誇りに思っております。

過去に大学を卒業された先輩方の皆様、そしてこれから入学、卒業される皆様、これからもよろしく願いいたします。

駆け出し社会人が大切にしたいと思ったこと

2016年卒 小板橋 永

171番目のランナーとなりました小板橋永です。

社会人として2年目を迎え、社会という荒波にもまれながら日々自身の成長と働くことの厳しさを痛感しています。

思えば1年前、卒業式で歌手の木山裕策さんが名曲「home」を熱唱してくださいました。まだ学生を続けたいと思う一方で、少しでも早く社会貢献をしたいという複雑な心境の中卒業したことを思い出します。卒業旅行でバリ島に行き現地の文化に触れたこと、沖縄でマリンスポーツを通してその爽快感と楽しさを感じたこと、一般道の旅と題して高崎から三重県の伊勢神宮まで多くの県に寄り道しながらドライブしたこと、大学時代に友人と好きなアーティストの話から社会情勢や経済の話まで夜遅くまで語り合ったこと。大学時代のそういった思い出は今でも私にとって社会人としての基礎となり、モチベーションにもなっています。

大学を卒業して私は公安関係の仕事に就きました。学生時代には考えてもみなかった職業です。実際に働いてみると自分自身の力不足を痛感し、また社会貢献できるようになるにはまだまだ知識や経験が必要であることを知りました。しかし今では同期や先輩方に支えられながら日々仕事に励んでいます。

私が学生から社会人になって大切にしたいと特に感じたことは2つあります。

1つめに四季を感じることです。目まぐるしく過ぎる日々のなかで、四季を感じることの大切さを知りま

した。大学時代は時間の融通が利くため、行きたいときにどこにでも行くことができます。しかし社会人は思いのほか時間がなく休みもなかなかとれません。そういった状況になり初めて、春には花見、夏には海水浴やキャンプ、秋には紅葉狩り、冬には雪見やスノーボードと、それぞれの季節にそのときにしかできないことを思う存分楽しむことの大切さを知りました。社会人として忙しい毎日ですが、四季を感じることで単調になりがちな毎日に彩りを与えていきたいと思います。みなさん日本に生まれたからには四季を感じないと損ですよ!(^_^)!

2つめに職場以外の友人をつくることです。私は社会人サークルに所属し、多くの人とフットサルやバレーボール、ボルダリング等で交流しています。異業種の人と関わることができるので、様々な価値観に触れることができとても刺激的で有意義です。実際社会人になると職場の人と大半の時間を費やすこととなります。そうなると偏った価値観になりがちです。またどうしても仕事のことが頭から離れなくなってしまいます。上司に叱られ、自分の力不足と仕事との適性に悩んでしまうこともしばしばあります。そうなったときに職場以外の居場所をつくりコミュニケーションを図ることは非常に大切なことです。社会人サークルを通して多くの人と交流することで、良い意味で仕事のことを忘れることができ学生時代を思い出せますよ(^_^)

社会人は学びと発見の連続です。この1年間で経験したことと学んだことは計り知れません。これからもその経験を生かし社会という荒波に積極果敢に挑戦していきます。

次は双子の弟の小板橋克さんにバトンを引き継ぎます。

置かれた場所で咲くために

2016年卒 小板橋 克

小板橋永よりバトンが渡り、172番目のランナーとなりました小板橋克です。永とは22年間一度も離れることなく同じ学校に通いましたが、就職を機にそれぞれの道に進むことになりました。キャンパスを歩けば、私のことを永と勘違いした人に声をかけられたことも今では良い思い出です。

思えば私が将来について考え始めたのが大学2年生の春。そのときは漠然と公務員になりたいと考えていました。その後、業界研究を通して公務員について知るうちに、その良さに気づき、大学3年生の夏には群馬県庁でインターンシップ生としてお世話になる機会に恵まれました。実際に職員の方々の働きぶりを目の当たりにすると、この場所で仕事がしたいと強く思いました。業務の幅も広く、福祉、土木、教育、スポーツと様々なことも魅力の一つでした。そこから、モチベーションも高まり、前を見据えて必死に勉強しましたが、結果は不合格。今の仕事に就きました。入社したからには、全力で！と思い続けてもう2年目に突入しています。

『置かれた場所で咲きなさい』これは私が大切にしている本です。結婚しても、就職しても、子育てをしても、「こんなはずじゃなかった」と思うことが、次から次に出てきます。そんな時にも、その状況の中で「咲く」努力をしてほしい。というのがこの本の伝えたいこと。その言葉を胸に、日々業務に励んでいるわけですが、今まで経験したことのない高い壁に直面し「こんなはずじゃ、、、」と思うことが多々あります。給料は低くても生き生きと仕事をしたい、自分に適した職業は他にあるのではないかと、大学生の時に目指した公務員をもう一度目指してみようか。様々な思いが錯綜し、ないものねだりをしている自分がいます。そんな時に出会ったのがこの本です。それを教訓に、仕事は勿論、資格試験の勉強にも全力で取り組んでいます。また、会社として参加する地域のボランティア活動に積極的にに関わり、週末に開催される勉強会にも自主的に参加しています。それらに参加することで様々な人と出会い見識を深めることができ、地元の良さにも気づくことができました。

就職して1年2か月が経ちましたが思うように仕事ができずに、自身の力不足に嫌気がさすことがありますが、今の仕事で必死に「咲く」努力をしています。周りの友達は充実した仕事をしているのに、、、自分はそうじゃない!と何度思ったことでしょうか。しかし、そのような思いも今は消え、前向きに仕事に取り組んでいます。どんな道に進もうと、どんな未来を選ぼうと、その場所で最大限努力することの大切さを学んだ1年と2か月でした。働き始めた頃は自分には合っていないと思っていた仕事ですが、日々業務をこなし、知識や経験を積んでいくことで、その仕事の魅力や面白さを見出すことができました。これからもそのことを一つ一つ積み重ね、より自分の仕事を好きになっていけたらと思います。